

Title	コメント4
Sub Title	Comments 4
Author	神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.80, No.2・ 3 (2011. 6) ,p.136(234)- 138(236)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	シンポジウム：地中海世界の旅人たち：中世から近世へ
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20110600-0136

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

いう意図をもっていたようだが、ハジャリーはこの自伝執筆の過程でこれまでの自分の人生が神の恩寵に満ちていたことにあらためて思い至ることになる。モリスコとして異教徒に囲まれた境遇で育ちながらも、イスラーム信仰とアラビア語を身につけ、それを守り通すことができたのは、とりもなおさず神の特別の恩寵があればこそのことだったのだと気づくのである。こうして、人生最後の旅の中でハジャリーは、自分の人生を神の恩寵による様々な奇蹟にいるとられた特別なものだったのだと認

識することになったのである。
ハジャリーの例に見られるように、旅とは物理的な現実世界を移動すると同時に、旅人の内面世界においてもある種の移動をともなうものである。ハジャリーは、キリスト教世界とイスラーム世界との間を横断し、またイスラームの聖地へと移動していく過程で、自己のムスリムとしての意識をより高め、内面世界においてもイスラーム的な境地へと旅をしていったといえるのではないだろうか。

コメント4

神崎忠昭

アンリ・ピレンヌ（一八六二—一九三五年）は「イスラームの登場により、それまでの軸であった地中海のコミュニティ・シヨンは衰え、軍事的にもアラブ勢力はコンスタンティノープルや西ヨーロッパを圧迫し、さらに教義的にも東方キリスト教世界と西方キリスト教世界の分

断を決定づけた。その結果、ローマ教皇がフランク王国のシャルルマーニュに戴冠するに至り、これらの諸要因によって、農村を基盤とする停滞的な中世ヨーロッパが成立した」とする構想を打ち出し、ヨーロッパ中世史研究に画期をもたらした。このピレンヌ学説はさまざまに

批判されているが、私たちはどこかで十字軍以前の西ヨーロッパが静止的で閉鎖的であると考えているように思える。

だが、たとえば中世初期のベネディクト修道院が孤立した存在だと考えるのは問題であろう。何よりも修道院は大領主であったからである。一例を挙げれば、パリのサン・ジェルマン・デ・プレ修道院は、六世紀に創建された後、歴代のフランク王たちの尊崇を集め、広大な所領を集積した。九世紀前半に院長イルミノンが著した「所領台帳 *polypticon*」が残っているが、それによれば二四所領を擁し、約一万人以上の農民を支配していたという。そのようなカロリング期の大修道院は「閉鎖的な再生産圏ではなかった」と指摘されている。修道士は理念的には禁欲を旨とはしているが、現存する当時の修道院の豪壮な建物や遺構が示しているように、高度な消費生活を営んでおり、その維持や領民の生計のために、市場から多くの物資を調達し、のみならず余剰を生み、広い地域にわたる市場経済の一環をなしていただろう。また、このような物的なネットワークは、必然的に広範な情報網をもたらしたに違いない。

筆者は修道士ラウル・グラベル（九八〇年頃—一〇

四六年頃）が著した『歴史五巻』という小さな「窓」から一〇・一一世紀の西ヨーロッパを見るのを常としているが、この本はクリュニー修道院を核とするネットワークについても興味深い例を示している。

ラウルは、クリュニーの第四代院長マイオールス（九〇六頃—九九四年五月一日、在任九六四年—九九四年）と第五代院長オディオ（九六二年頃—一〇四八年、在任九九四年—一〇四八年）の時代に生きた。この時代のクリュニーは「至聖なる場クリュニー *ad locorum sanctissimum Cluniacum*」と讃えられ、クリュニーの歴代院長は皇帝をはじめ、多くの聖俗貴顕の尊崇を深く集めていた。修道院長マイオールスは、皇帝オットー二世に推挙され、教皇座を提供されたこともあり、死後も「彼の聖性の誉れのために、ローマ世界全体から、男も女も、俗人も聖職者も、数多くの者が押し寄せ、そこから様々な病を癒されるという恵みを得て帰」り、疫病が猛威を振るったが「聖人たちの多くの聖所において、この恐るべき疫病の治癒が見出されたとはいえ、もつとも多くの人々が集まったのは三人の聖なる証聖者の教会であった。すなわち、トゥールのマルティヌス、バイエルンのオドルリクス、そしてかの尊ぶべき師父マイオールスである。

願いによって、治癒の恩恵が見出された」という。マイオールスの時代、九八一年に献堂された第二クリュニー聖堂は、その復元図について不明の点はなお多く存するが、賓客のための施設や俗人の墓地が存すると考えられている。多くの人々が訪れていた証拠であろう。

外から人々がマイオールスに会いに來ただけではない。彼もまた修道院の外へ旅していた。それを端的に示しているのは、彼が「サラセン人」に捕らえられたことである。八八九年から九七五年にかけて南仏ラ・ガルデ・フレネに拠点を有していたイスラーム教徒たちは、捕らえたマイオールスの身代金としては銀一〇〇ポンドを要求し、彼はクリュニーに宛てて「悪魔ペリアル群が私を取り囲み、死の罟が私を捕らえた。私と、私とともに捕らえられた者らのために身代金を送ってほしい」と手紙を認めた。留守を預かる修道士たちは修道院を飾る装飾を剥がし、身代金を用意したという。彼が捕らえられたのはイタリアからの帰途であった。マイオールスはフランス国内のマルムーティエ修道院、サン・モル・デ・フォッセ修道院、サン・ピエール・ル・ヴィフ修道院、サン・ジェルマン修道院、レオメ修道院、フェカン修道院などだけでなく、さらにスイスのペイエヌ修道院、ラ

ヴェンナのサン・アポリナーレ・イン・クラッセ修道院、バルマのサン・ジョヴァンニ修道院、パヴィアのサンタ・マリア修道院、ローマのサン・ピエトロ・チェロ・ドーロ修道院、サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーレ教会などの霊的指導に携わっており、移動し続けていたのだ。ベネディクト修道士は「一所定住」を厳守するとされるが、ベネディクトゥス戒律そのものに、第五三条「賓客へのもてなし」、第六一条「外部の修道士へのもてなし」、第六七条「旅における修道士のふるまい」などの規定があることが、修道院および修道士が外界との交流を保ち、移動していたことを示しているよう。

さらに「ヨローツパ」を超え、人々はエルサレムにも向かった。『歴史五卷』が描く有名な一〇三三年の大巡礼、あるいは生涯に四度の聖地巡礼を行い、その帰途に没したというアンジュー伯フルク三世（九七二—一〇四〇年）の生涯がこのことをよく示しているよう。一一世紀末以降に比べれば、確かにはるかに少ない巡礼の記録しかない。だが残る記録によれば、巡礼者たちは何カ月もかけ、ある場合にはムスリム船に乗り、聖地を目指した。わずかとはいえども、たとえ記録には残らなくとも、移動の必要と欲求はあり続けたと筆者は考えるものである。